

が、今では宮田小路は一条通・大橋通四丁目に分属して商店街となり、町沖も新興市街になった。
現在の市街地の区も以上の区を継承したものであるが、第一次都市計画完了に伴う区画整理と町名の変更で異動を生じたものが多い。

第八章 渡川 の 改 修

洪水を年中行事の一つと、あきらめていたとはいえ、中村とその周辺の人々が、渡川（四万十川の中村付近での俗称）改修の夢を見つづけるのは当然のことであった。しかし、あまりにも川が大き過ぎて、容易に実現されるとは考えられなかった。

明治三十三年（一九〇〇）二月五日の幡多郡会（議会）で、四万十川改修のことが議題にのぼり、県知事に建議した。これは前年の洪水が、明治十九年（一八八六）、同二十三年（一八九〇）のものとともに、明治の三大洪水と呼ばれる程のもので、その被害が甚大であったためである。県としても、その必要は痛感したであろうが、簡単に着手できる工事ではなかったにちがいない、それきりに終っている。

その後も、渡川の氾濫はやむことを知らず、明治四十年、四十四年、大正元年、三年、七年、九年、昭和三年と、大洪水が続いた。その間、改修実現のため人々の努力も休みなくつづけられ、ついに悲願達成の日訪ずれ、昭和四年（一九二九）四月、待望の渡川改修工事起工式が挙げられた。この工事は国の直轄事業として行い、主として渡川とその支流の後川・中筋川の流域（中村町・後川村・東山村・下田町・八束村・具同村・東中筋村）を水禍から救う

ものである。

改修計画の概要は

本流、渡川。左岸は後川村佐田、右岸は具同村今成から河口までの十三キロ。

支流、後川。左岸は東山村秋田、右岸は中村町上谷から本流との合流点までの七キロ。

支流、中筋川。東中筋村の狭窄部から本流との合流点までの十一キロ。

合計三十一キロにわたって川巾の拡張、堤防の築造、護岸の施工などを施すものである。これによって二千五百ヘクタール余の荒蕪地は良田化し、一千一百四十ヘクタール余の耕地・宅地が水害から免れることになる。

初年度は諸調査と準備に暮れ、翌五年度から本工事に着手した。その後、大出水もなくて工事は順調に進んだが、昭和十年八月二十八、二十九日の大洪水は、これまでの工事に大損害を与えたばかりでなく、中村全市街は沈没の状態となって大被害を受けた。

昭和十年の大洪水

昭和十年（一九三五）八月二十七日、奄美大島を襲った颱風は針路を北東に変え、二十八日午前六時その中心は宮崎市の東方海上にあって七二八耗を示し、極めて緩慢な速度で北北東に移動し漸次方向を東寄りに転じ播磨灘に出たため、中村町も暴風雨となり大洪水に襲われるに至った。

八月二十五日時々小雨、二十六日も時々雨で東風や強く吹き、二十七日大雨となったけれども雨間があって洪水を予想する程のことはなかったが、北東の風力は次第に加わり、夕方に至って風雨ともに烈しくなり、両川は急速に

氾濫して交通杜絶した。二十八日はいよいよ風雨猛烈を極め午前中に電信電話も不通となった。両川の水位は刻々に上昇し渡川具同量水標は午前七時三米七〇を示し、爾後一時間最大一米二二を増し、二十九日午前一時最高一二米〇七、後川大用寺量水標最高一〇米三一に達した。

浸水は二十八日正午、後川沿岸の耕地を呑み不破県道に迫った。午後二、三時ころには宮田小路、南京町、新町方面を襲い、五、六時までには築地を残して全町を浸水した。その水勢は物凄く天神橋筋をはじめ、東西に通じる街路は奔流となって歩行はもとより救助船の往復にも困難を極め、荷揚げの暇も与えず夕方には既に全戸の床上を浸し、低所は階上数尺にも及び両川岸の百笑、不破、右山、角崎方面は大海のようであった。四万十川鉄橋々台の頂上を洗う濁流を築地坂を越し、後川堤防は余すところ一メートル足らずの危機に類した。実に中村町洪水中の最大なもので、浸水と云うよりは寧ろ沈没と云う言葉が当はまる有様であった。斯くて二十九日午前一時過ぎから漸く減水しはじめ夕方までには全町の退水を見た。

中村町の被害

一、浸水面積	三六〇ヘクタール	一、商品類	約七〇万円
一、罹災世帯数	一、六五〇世帯	一、家財類	約二〇万円
一、同家族数	七、二四三人	一、建築物	(住家) (非住家)
一、負傷者	六〇人	流失	二二
一、道路破損	二、五〇〇米	全壊	七五
一、水路	二七三米	半壊	二〇九
			一九四

床下浸水	一五〇	八五	桑	四三、一ヘクタール
床上浸水	一、五〇〇	八五	園芸農産物	六、五〇〇
階上浸水	五〇〇		其他蔬菜	二、九〇〇
計	二、四五六	六七〇	計	一二八、五〇〇
一、農作物			一、農用地	
水 稲	五七、三ヘクタール		田	二反
陸 稻	〇、八〇〇		畑	二〇〇反
甘 藷	九、四〇〇		道 路	二二七メートル
果 実	二、六〇〇		水 路	二七三
杞 柳	五、九〇〇		堤 防	一八

第八章 渡川の改修

今回の洪水は増水きわめて早く、荷上げの閑が少なかったため被害が殊のほか甚しかった。これは町民が洪水に慣れて浸水の要領を知っていたことが大きな禍を来した。と云うのは従来町内浸水の順序は先づ町内排水溝に溢れた水が(増水によって後川の水位が排水溝より高くなると排水閘を閉鎖するため)小姓町、上町西裏などの低地を浸し、次いで後川が上町、紺屋町、南京町、新町などに流入し、最後に京町、中ノ丁の高所に及んだのであるが、今回は治水工事によって西北から東へかけて後川堤防が完成して市街への浸水を阻んだので、南方の未完成の箇所から急流となって押寄せ瞬く内に京町、中ノ丁以東を呑み、京町、中ノ丁の高所を越して市街の西部に流れ込んだので、天神橋はじめ東西に通じた街路は瀬となって急速に全戸に浸水した。いわば従来の浸水順序が逆みこんでいる町民は不意打ちを食ったわけである。然しながらこの大洪水に一名の死者も出さなかったことは多年の洪水に対する訓練の

賜物である。

水害後の中村町、それは実に悲惨の極みで瓦は剥がれ壁は落ち、電灯はなく水道は止り、悪臭の屋内の生乾きの座板の上に荒蕪を敷いて雨をしのぐ人々、水浸しになった無数の畳、家具、商品、或は家畜の死体が散乱する街路、さながら地獄の図であった。

中村町以外の町村被害表

(町村名) (浸水面積)	住				家			
	(流失)	(全)	(半)	(床上浸水)	(床下浸水)	(その他)	(計)	非住家
下田町	五〇〇 ^{ハナ}	二五	一〇	五〇	七〇〇	五〇	〇	八三四
東山村	四一〇	二〇	一二	九	二二〇	三〇	〇	二九一
後川村	三一〇	〇	〇	一一	一一二	五〇	四九	二二二
八束村	四二〇	九	六	七	二七〇	一六〇	〇	四五二
具同村	三八五	一六	一三	一五	二一〇	五〇	三七	三六一
東中筋村	六一五	五	八	二七	一七〇	五〇	〇	二六〇
中筋村	三一五	〇	一八	二九	八八	二二	〇	一五七
								二五七

渡川水位表

(※印は工事未施行箇所、
無印は工事施行中箇所、
△印は工事区域外)

量水標位置	高計 水位画	昭和十年		明治二十三年		昭和十年洪水水位との差
		洪水高水位	明水高水位	洪水推定高水位	明水推定高水位	
幹川筋 佐田	一五・二一 ^(※)	一七・〇七 ^(※)	一五・二一 ^(※)			(+) 一・八六 ^(※)
百笑	一一・九七	一二・二一	一二・八〇			(+) 〇・二四
具同	一一・六五	一二・〇七	一二・五〇			(+) 〇・四二
坂本	一〇・四八	一一・五五	一一・二〇			(+) 一・〇七 ^(※)
井沢	八・五一	九・七三	八・五一			(+) 一・二二 ^(※)
後川筋 麻生	—	一一・六七	一一・九六			△
大用寺田	九・六〇	一〇・三一	九・七二			(+) 〇・七一
安並	九・四四	一〇・二三	九・六三			(+) 〇・七九 ^(※)
佐岡	九・〇七	一〇・〇五	九・五〇			(+) 〇・九八 ^(※)
中筋川筋 有岡	—	一二・二一	一二・二三			△
生ノ川	九・六三	一一・九九	一一・八〇			(+) 二・六三 ^(※)
国見	九・三六	一一・八五	一一・九〇			(+) 二・四九 ^(※)

この大試練によって工事計画の変更、あるいは追加となつて、より完璧な改修が行われることになった。しかし、その後の国庫緊縮や太平洋戦争などのため、工事は延期に延期を余儀なくされ、当初の十四力年計画が四十力年を過ぎた現在、なお三十パーセントの工事が残されているという。

それでも、中村旧市街と、その南に続く右山・角崎地区は強固な堤防に囲まれて完全に水害から護られ、渡川西岸の具同地区・後川左岸の東山地区の堤防も完成して急速に市街化している。また、中筋川と本川との合流点の付け替えによって、洪水時の渡川本流からの逆流が防がれるようになり、中筋川沿岸も良田化し、中村市の飛躍的發展に拍車をかけている。